小学校低学年の部

最優秀賞

みんな　ありがとう

南小学校　三年　上道暖叶

「いたーい。今までの中で一番いたい。」

ぼくは、十二月三日の朝、学校に行くとちゅうでころんで泣いて家にもどって来ました。その後、すぐにびょういんに行きました。なおらなかったらどうしようと、ぼくは不安でした。びょういんで、けんさしたけっか、右ひじがこっせつしている事が分かりました。ぼくは、ショックでした。ギブスで右うでがかためられて動かなくなりました。

びょういんから出て、お母さんの車にのって、

「右手が動かない。テニスができない。これからどうしよう。」

いろんな事ができないと思っていっぱい泣きました。

学校に行くと、四時間目のとちゅうでした。教室に入ると、みんなが、

「どうしたの。」

と、言いました。先生は、

「暖叶くんがこっせつしたので、みんなで、サポートしてください。」

と、言いました。ぼくは、ありがとうと思って、少しほっとしました。

きゅう食の時間になると、ぼくのもりつけの当番をかわってくれた友だちがいました。ぼくの分のきゅう食を運んでくれたり、かたづけてくれる友だちがいました。

べん強がはじまると、黒板に書いた事を、ノートにうつしてくれる友だちがいました。帰る時は、ランドセルをじゅんびしてくれる友だちがいました。ジャンバーのチャックをしめてくれる友だちがいました。朝、学校に行く時、家によってくれた友だちがいました。ぼくは、みんなにいっぱい助けられました。

その時は、

「ありがとう。」

と、言う事しかおかえしができませんでした。

三年生になってクラスがえがあって、二年生の時のクラスの人とはべつべつになった友だちもいます。今は、こっせつがなおって、ふつうに右うでは動きます。あたり前に動く事が、すごくうれしいです。

ぼくは、いろんな人に、いっぱい助けられたので、こんどは、こまっている人がいたらすすんで助けたいと思います。

みんな、ありがとう。

講評

転んで骨折をした時、かけてくださった先生の言葉に込められた思いやり、給食を運んでくれたりノートを写してくれたりした友達のやさしさがくわしく書かれています。そして、これらを通して気付いた「助け合うことの大切さ」と「感謝することの意味」が、メッセージとしてしっかり発信されています。

優秀賞

冬のある日

南小学校　三年　髙松礼愛

わたしの家のとなりには、お年よりのおじいさんとおばあさんがすんでいます。おじいさんとおばあさんは、わたしの家のとなりの家とはべつに、どこか遠くの場所に本当の家があるらしく、一か月に一回くらいわたしの家のとなりの家に来て、とまっています。おじいさんとおばあさんは、年をとっているので、こしが曲がっていて、歩くのがとてもゆっくりです。おじいさんとおばあさんは、とてもやさしく、わたしたちが外で遊んでいると、いつもにこにこしながらあいさつをしてくれます。

きょ年の冬、毎日、十和田市にたくさんの雪がふり、わたしの家の周りにもたくさんの雪がつもりました。わたしは、お父さんと一しょに、毎日、雪かきをしました。雪かきがちょうど終わったころ、となりの家のおじいさんとおばあさんが車で来ました。おじいさんとおばあさんの家の前には、わたしのおなかくらいの高さまで雪がつもっていました。おじいさんとおばあさんは、雪がつもっているせいで、自分の家のしき地に入ることができなくて車をしき地の前にとめて、車の中でしばらくまっていました。

わたしは、おじいさんとおばあさんが家に入ることができなくてこまっていると思ったので、お父さんに、

「おじいさんとおばあさんがこまっているんじゃない。となりの家の雪かきしてあげよう。」

と言いました。するとお父さんは、

「おれも今、同じこと言おうと思ってた。雪かきしてあげよう。」

と言いました。わたしはお父さんと一しょに、おじいさんとおばあさんに、

「雪かきするのでまっててください。」

と言いました。

わたしとお父さんは、いっしょうけんめいとなりの家の雪かきをしました。わたしとお父さんが雪かきをしていると、おじいさんとおばあさんが車からおりて、わたしとお父さんに向かって、

「ありがとうございます。もうしわけないです。」

と何ども言いながらおじぎをしていました。わたしは、おじいさんとおばあさんに感しゃをされたことで、さらに、「もっとがんばろう」と思いました。わたしとお父さんは休まずに雪かきをしました。雪かきが終わると、おじいさんとおばあさんが何どもおじぎをしながら、

「ありがとうございます。」

と言っていました。わたしは、いっしょうけんめい雪かきをしたことや、おじいさんとおばあさんに感しゃされたことで、体中があたたかくなり、とても気持ちがよくなりました。わたしとお父さんが家にもどって少したったころ、おばあさんが家をたずねてきて、わたしたち家族に、おかしを持ってきてくれました。

わたしは、今回こまっている人をたすけることが、とても気持ちがいいことだということを学びました。これからもたすけあいの気持ちを大切にして、まわりのこまっている人をたすけたいと思います。また、いつも、まわりの人にたすけてもらっているという感しゃの気持ちを大切にして、毎日生活していきたいと思います。

講評

時々来るとなりのおじいさんとおばあさんの家の雪かきを行うお父さんと私。おじいさんとおばあさんの「ありがとう。」の言葉で、さらに「思いやりの心」は育まれていくことが、「体中があたたかくなり、とても気持ちがよくなりました。」に表れています。雪国の生活の中に「思いやり」を見いだした作品です。

優良賞

夏休み中の手つだい

北園小学校　三年　薄井鞍人

ぼくは、夏休みの間おじいちゃんとおばあちゃんの家に行きました。さいしょに外でおばあちゃんと弟とぼくでバドミントンをしました。お母さんは仕事でいそがしかったので、ぼくと弟でおばあちゃんの家でるすばんをしました。おばあちゃんといっしょに、おばあちゃんの仕事のビジネスインのそうじをしたり、家の料理の手つだいをしたりしました。ビジネスインのトイレそうじやシャワー室やろうかのそうじを手つだいました。

一番たいへんなそうじは、シャワー室のそうじです。なぜなら、シャワー室は十ヵ所あるからです。一ヵ所ずつていねいにそうじをするのがたいへんだからです。お手つだいをしてぼくが思ったことは、トイレ六ヵ所とシャワー室十ヵ所を毎日そうじしてすごいなあと思いました。おばあちゃんのおかげでお客さんは、気もちよくすごせていると思います。まだコロナが落ちつかないので、とくにちゅういしてかんせんに気をつけて、お客さんのためにそうじをしているおばあちゃんの事をすごいなあと思いました。ぼくもおばあちゃんみたいにお客さんをよろこばせたいです。

ぼくは、おばあちゃんの家でいっしょに料理をしました。カレーを作りました。まず、じゃがいものかわむきをしてじゃがいもを切りました。おばあちゃんは、「ねこの手にして切った方がいいよ。」とコツを教えてくれました。おばあちゃんは、コツをつかってはやく切ることができてすごいなあと思いました。次はにんじんを切りました。ぼくもコツをつかって切ってみました。そして、さいごはお肉を切りました。その後、おばあちゃんがカレーをにこみました。おばあちゃんは、みんなのためにおいしくなる思いをこめてにこんだんだと思います。カレーにかぎらず、いつも心をこめておいしい料理を作ってくれていると思います。ぼくのお母さんもいつもこうやって作ってくれていると思います。だから、ぼくはうれしいです。

手つだいは大へんだったけれど、ぼくもおばあちゃんやお母さんがよろこんでくれるように、これからも手つだいをがんばりたいと思います。

佳作

まちにまった発表会

南小学校　三年　中渡心乃

わたしは、クラシックバレエを習っています。本当は三月にあった発表会が、八月にえんきになりました。夏休みだったし、レッスンいがいでも、もっとうまくなりたいから、家でも毎日練習しました。発表会が近くなり、わたしはとてもどきどきわくわくしました。

青森県でもコロナウイルスがふえてきていたので、自分もならなきゃいいなと思っていました。そしたら、妹がねつを出し弟も体調をくずしました。妹と弟が通っているほいく園では、コロナウイルスが出ていることを知りました。わたしはこわくなってきました。そう思っていた時、わたしもねつを出しました。

次の日、発表会のリハーサルだったので、ママがバレエの先生に電話をしました。

「あさっての本番のために明日のリハーサルはお休みしましょう。」と言ってくれました。

わたしは、本番のためにたくさんねて、今日のうちになおそうと思いました。ママは、つきっきりでわたしのおせわをしてくれました。次の日ねつも下がり、元気になりました。わたしはこれで発表会に出られると感じ、たくさんねたかいがあったなと思いました。

いよいよ、こう原けんさをする時、わたしは、

「いんせいでありますように。」

と言いました。けっかは、ようせいでした。

わたしは、くやしくて、かなしくて、「今まで練習してきたことが、むだになった。もういやだ、いやだ」と、今まで感じたことのない気持ちになり、たくさんなきさけびました。ママといっしょになきました。ママは、頭をなでながら、

「大じょうぶ、大じょうぶ。」

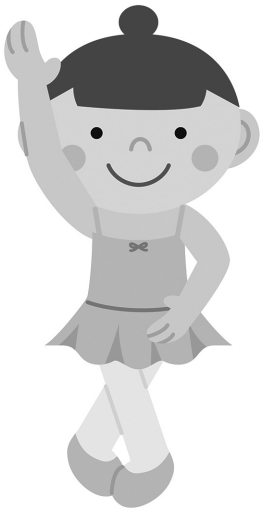
と言ってくれました。

わたしは、発表会に出られないくやしさもあったけど、コロナになってしまったこわさもありました。おじいちゃん、おばあちゃんにうつっていないかしんぱいになり、わたしは、電話しました。声を聞き、二人とも元気そうで、「よかったな」とあんしんしました。

「明日の朝、もう一回けんさして、いんせいだったら発表会に行く。」

とママに聞かれたけど、まわりの人にうつしてめいわくをかけたくなかったので、わたしは行くのをやめようと思いました。

わたしは、コロナウイルスになって、自分もつらかったけど、まわりの人のことを思って考えるようになりました。これからも、まわりの人たちの手助けや、めいわくをかけないように、すごしていきたいです。



小学校高学年の部

最優秀賞

赤ちゃんとのふれあい

西小学校　五年　塩沢　翼

「ミルク八十お願いね。」

これは何の言葉かと言うと、ほ乳びんに粉ミルクスプーン四さじ、お湯八十ミリリットル入れて作ってちょうだいというお母さんからの指示です。一日五回くらいお願いされるので、言われたらすぐにやります。初めて教えてもらった時は、きれいにすりきれなかったけど、今ではフタをうまく利用して素早くミルクを作れるようになりました。

ぼくの家族はお父さん・お母さん・妹・今年の二月に産まれた弟の五人家族です。もうすぐ六ヶ月になる弟は、泣くこともへって、あやすとよく笑いかわいいです。

産まれて退院してきたころからをふり返ってみると、赤ちゃんのお世話はすごく大変なんだと分かりました。

まず一つ目はだっこです。最初は赤ちゃんの首がまだすわっていないし、体も小さく細かったので、だっこするのがこわかったです。でも、お母さんが料理やそうじなどでいそがしい時は交代しながら面どうを見ていました。毎日だっこするうちに不安定だっただき方もうまくなり、ねせれるようになった時ほめられたのがうれしかったです。ただ、弟の体重もだんだん重くなってきたのでうでがつかれる時もあります。

二つ目は、ね返りするようになった今です。平らなところだとすぐね返りするので、注意が必要です。特にベッドやソファーからの転落が起きないように、そこを少しでもはなれる時は気をつけなければいけません。

これまでの赤ちゃんとのふれあいを通して学んだこと。それは、日々成長していく中で出来るようになることが増える分、同時にきけんなことも増えるということです。たまに見たいテレビに集中しすぎて、となりで泣いているのに気づかないことがあります。周りのことも考えれるようにしたいです。

そして、赤ちゃんにとってお母さんの存在が最強であることです。ぼくたちでは泣き止まない時でも、お母さんだと顔を見ただけで泣き止むので不思議です。それに、お母さんは赤ちゃんの世話だけでなく、料理や洗たくなどもやります。今だと、夏休みのドリルの丸つけもあったり、部活や習い事の送げいも時々してくれたりします。それを考えると、どこのお母さんたちも子供のためにサポートしてくれる強い味方です。そんないそがしいお母さんたちを支えてくれるお父さんたちがいるから、家族っていいなと思います。

これからぼくに出来ることは何か。まずは、目指している目標に向かって勉強をがんばることです。今まで言われてからやることが多かったので、進んでやるようにし、親に迷わくをかけないようにしたいです。そして空いた時間で、お母さんが大変そうな時は手

伝ってあげたいです。
弟は次に何が出来るようになるのかな。歩けるようになるのはいつかな。早く一緒にハンドボールやりたいな。元気に大きく成長してね。

講評

新しく増えた家族のうれしさをつづった、心温まる作品です。今年二月に産まれた赤ちゃんの成長は、兄である自分の成長をも促し、「これからぼくにできることは何か。」とまとめています。また、赤ちゃんの誕生は、家族のすばらしさとともに、家族の絆を強くしてくれたことも、しっかりと伝えることができています。

優秀賞

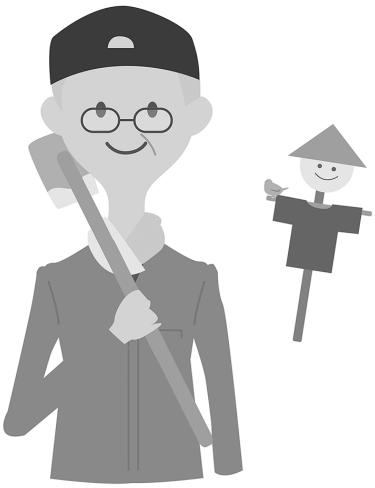
祖父とのメモリー

西小学校　五年　畠山大河（はたけやまたいが）

ぼくの祖父は、ＡＬＳという病気で今年の六月に亡くなりました。この病気は、筋肉がどんどん弱くなって手足が動かせなくなるなん病です。
祖父はお米を作る農家だったので、病気になる前は大きなトラクターに乗ったり、コンバインで稲かりをしたり、とてもかっこよかったです。そして、ぼくたち家族を何回か旅行に連れていってくれました。ディズニーランドや東京タワー、宮城県の松島にも行きました。いつもおこづかいをくれて、ぼくたちにとてもやさしかったです。
祖父がそのなん病だと知った時、ぼくはビックリしてショックだったけど、一生けん命治りょうしているから治ってほしいなと思いました。ぼくたち孫と会ってご飯を食べるのをとても楽しみにしていたので、何回も祖父の家に行ってトランプやオセロをして遊びました。その時の祖父は笑顔でやさしくて、ずっとこんな日が続けばいいのにと思いました。でも、ぼくの小学校の運動会が終わったころ、祖父は肺炎で入院してしまいました。お見まいに行った時、ぼくの運動会の話をしました。
「ぼく徒競走で一位を取ったんだよ。」
とぼくが言うと、祖父は、
「うん。」
と言いました。またぼくが、
「チャレンジ走では最下位だったよ。」
と言うと、祖父は、
「うん。」
と言いました。祖父は、入院してからようだいが悪化して、「うん」しか話せませんでした。だけど、ぼくの話をすごく聞いてくれてすごくうれしかったです。元気だった時は、
「宿題やったのか？」
「羊の赤ちゃん見たか？」
「お母さんとお父さんのお手伝いをちゃんとしろよ。」
など、たくさん話せていたのにだんだん思うように話せなくて、苦しそうでかわいそうだと思いました。

ぼくが祖父を見て、大変だと思ったことは車いすに乗ったりおりたりする時や移動する時です。乗ったりおりたりする時は、足に力が入らないから、うでの力で乗りおりします。移動する時もうでの力をたくさん使います。車いすは、ドアの開けしめやだん差、せまい通路、曲がる時、坂道やでこぼこ道などが大変です。一人で行けない時は、だれかに助けてもらわないと、きけんです。ぼくは、祖父の車いすをおした事があって周りの人にぶつからないように気をつけたり、下り坂ではスピードがでないように、自分の方に引っ張って減速したり、祖父の気持ちを考えて歩くスピードを気をつけておしました。車いすをおすのは、かんたんそうに見えたけど思った以上にむずかしいと実感しました。

このように、車いすは大変ということが分かったので、車いすの人を見かけたら、祖父の事を思い出して、助けてあげたいです。



講評

農作業のこと、旅行に行ったこと、おじいちゃんの家で食事したこと、そして病院でのことなど、病気で亡くなったおじいちゃんと過ごした思い出が時間の流れとともに、自分の気持ちも織り交ぜながら書かれています。おじいちゃんのやさしさを思い出しながら、自分はどう行動していけばよいのかも、よくまとめられています。

優秀賞

世界のみんなを幸せに

西小学校　六年　洞内（ほらない）優李（ゆうり）

私の理想の世界は、障害のある人・ない人関係なく全世界の人が平等で差別もなく幸せに生きることができる世界になってほしいと考えています。また、いじめもなくなってほしいです。だから私は基本的人権の尊重を大切にしていけばいじめも差別もなくなるのではないかと思いました。

また、障害がある人は、全てできないわけではなく、人間同士ということは同じだから「できないことは何でも助け合えば成し遂げられる」を頭に入れて生活していきたいです。次は、いじめです。いじめは、いじめている人も悪いし、いじめられている人のことを見て見ぬ振りをする人も悪いと思います。このようなことをされている人は、自分が思っている以上、大きな悩みを抱えることになると思いました。

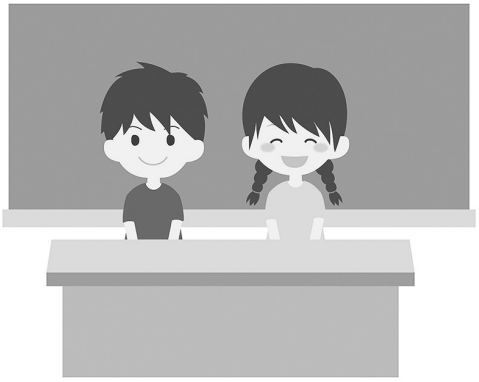
これらの他にも今は、コロナが大流行していて、コロナに友達がかかったとしてもバカにしたり差別をしたりする人がいるようですが、絶対にだめです。人のことをバカにすることは、言われた人がとても傷つくことだからこれからもしないようにしたいと思いました。

今、私たちにできることは全ての人が生活しやすいように一人一人が努力して人を助け、みんなが平等で過ごせるような世界にするために考えることです。まだ、私たちにできることはたくさんある

と思うけど私は今まで以上にたくさんの人を救い素晴らしい世界にしたいと考えています。

このことを生かしていけば、私は、学校・公共施設などいろんなところで思いやり・助け合いの二つが一つの「ありがとう」につながります。学校でできることは、下学年のことを思いやって行動したり、いじめられている人を助けてあげたりすることができます。公共施設の場でできることは、図書館では静かにしたり、お年寄りの人や妊婦さんには、席をゆずってあげたりすればいつでも、どこでもいろんな人が幸せに過ごせると思いました。

これからも自分のことだけではなく、他の人のことを一人一人が考えて行動していき世界のみんなを幸せにできるようにふだんから心がけて生活していきたいです。



講評

高学年らしく現在の世界の情勢を見つめながら、「世界のみんなを幸せに」するためには、どのようなことが大切なのかが提案されています。さらに、視点を学校や公共施設、周りの人々に向け、「自分のことだけではなく、他の人のことを一人ひとりが考えて行動していく。」という考えも、しっかり述べられています。

優良賞

視覚障害になったとき

西小学校　五年　関（せき）　さくら

わたしは、三年生のときに教科書などの字が見えなくなってしまいました。次の日に学校を早退して病院へ行くと、心因性視覚障害と言われました。心因性視覚障害とは、ストレスによる心理的なえいきょうで、体のさまざまな所に障害がでます。その中でも二番目に多いのが視力障害だそうです。目には悪い所がないのに視力が落ち、メガネをかけても視力が良くならないじょうたいでわたしは、この視力障害と同じじょうたいでした。ふつうに歩いたり、走ったりするのはだいじょうぶでしたが、見ようとする物が見えないので大変でした。

他の人から「目が見えないのうそなんじゃない。」や「目が見えないのただふりしてるだけじゃない。」などといろいろといやなことを言われてしまいました。何日もいやなことを言われるのが続き、何でそんなことを言われるんだろうと思いました。でも、友達に言うと「そんなの気にしなくていいよ。」や「だいじょうぶ。」などやさしい言葉を言ってくれました。わたしは、それがとてもうれしかったです。そして、先生も授業で字が見えない時に字を大きくして教えてくれたのでとてもうれしかったです。日がたつと、わたしにいやなことを言ってきた人もみんなやさしくせっしてくれるようになりました。わからないことがあったときには、みんながやさしく教えてくれたので安心して学校に行くことができました。

目に見えない障害だったので、まわりの人に、りかいしてもらいにくかったと思いますが、この経験でみんなへの思いやりはとても大事なことだと思いました。

優良賞

助け合いを大切に

西小学校　六年　赤崎煌明

ぼくは、六年生になって一学期にいろんな場面で友達と助け合えることができました。その協力できた場面は三つあります。

一つ目は、運動会です。当日の前に、ぼくたちはたくさん練習をしました。しかし、応援団員の練習の時に声が小さかったり、動きがてきぱきできず、指示が出せなかったりして、先生にたくさん注意されました。だから、その反省を生かして、赤組白組に分かれて、たくさん話し合いました。応援を全校で練習するときは、下学年に教えてあげたり、声をかけ合ったりしてたくさん協力できました。そして、運動会の日、ぼくはとてもきんちょうしていました。でも、友達と声をかけ合ったり、競技で協力したりしてきんちょうがほぐれてきました。次の種目にうつるときはすばやく行動してみんなと声をかけ合えたし、決勝誘導の係では、特に低学年が迷っている時は誘導してあげれたのでよかったです。

次に、二つ目は修学旅行です。修学旅行では、班で行動することが多いので、たくさん助け合えることができました。班で歩いている時は、道を教えあって一人ぼっちにならないようにしたり、カメラを順番にとって一人だけ写ってないことがないようにしたりして、気持ちを考えながら過ごしました。また、よかったと思うところはあいさつです。ぼくは、人とすれちがう時やホテルの方とすれちがう時にたくさんあいさつができたのでよかったです。そして、お客さんに話しかけられた時も元気に明るく答えられたのでよかったです。協力したり、あいさつしたりしただけでも、修学旅行はもっともっと楽しくなりました。これから、この修学旅行で学んだことを生かせるようにしたいです。

そして、三つ目はバスケットです。ぼくは、三年生からバスケをしていていつも練習をしています。バスケットは、個人の一人で行うスポーツとはちがい、団体の五対五で行うスポーツです。だから、協力することが必要です。一人でプレーするよりも、五人みんなでプレーした方が有利で戦いやすくなります。ぼくがバスケットをしていて、特に良いと思うことは良いプレーをした時に「ナイス」と言って、背中をたたいてあげたり、けがをした時に「大丈夫」と声をかけてあげたりするところです。いっしょにプレーする仲間なのでやさしくせっしたいです。六年生でプレーする時にパスをまわしてシュートまでいける場面が練習であったので試合でもパスをまわして協力できるようにしたいです。そして、秋季大会で優勝したいです。

他にも、学校生活では、一年生をそうじの時や遊びタイムの時に呼んであげたり、クラスでも毎日、キラリを言ったりしています。クラブ活動や委員会でも、もっともっと協力して楽しくよりよい学校にしたいです。

ぼくは、友達と助け合うと、絆は深まっていくと思いました。だ

から、思いやりの気持ちを持ち、友達とたくさん助け合って、絆を深めていきたいです。そして、低学年のお手本になる明るいすてきな六年生になりたいです。

優良賞

思いやりではないもの

西小学校　六年　志田義一

ぼくは、自分で自分のことをやさしい人、思いやりを持っている人だと考えている。それは、学校の友達に

「やさしいね。」

と言われるからだ。しかしある出来事でぼくの考えがすべて変わってしまった。

ある日、遊ぼうと思ってぼくは、友達をつれて遊びに行った。そこでトラブルがおこった。他のところで遊んでいると友達が集団で悪口をいい、いじめをたくさんしていた。ぼくは、助けず、声もかけさえせず、ずっといじめられている友達を見ているだけだった。そのときぼくは考えていた。ぼくが「やめてあげなよ。」「なんでそんなことをするの。」と言ったら集団で、逆にぼくがいじめられると思って助けてあげるのか、あげないのか迷ってしまった。それから毎日その出来事を、心に入れて過ごしていた。

そしてある日に学校へいったら、またいじめにあっている人がいた。ぼくは前回のように、声をかけたり、助けたりすることができなかった。ぼくは心の中でその友達に「ごめん。」と言った。そのとき、いじめをしている人たちに

「やめてあげなよ。」

と勇気をもって言った子がいた。ぼくはほっとしただけだった。他にもいじめをされている場面があるのにずっと見ているだけでずっといじめを止めてくれる人をまっているだけだった。それから学校から家まで帰る時にいじめを止めた子のことを考えた。ぼくは気づいた。ぼく自身のやさしさは偽物だということが分かった。ぼくは友達にやさしいと言われてもそれが行動に移せないということは思いやりがないということだ。ぼくは、あのいじめを止めた子がどんな気持ちで「やめてあげなよ。」と言ったのかが少し分かった。そのおかげで、ぼくは勇気と自信を持つことができた。

それと、友達がけがをしたときのことだ。ぼくは友達がけがをしたときに、「だいじょうぶ。」や「保健室行ってきなよ。」と声をかけていた。しかし、ある日、友達がグラウンドで転んだときに、声をかけようとしたが他の人が先にかけつけた。そしたらその人が保健室まで付きそってくれた。ぼくは気づいた。その人と自分を比べると、ぼくは全く思いやりがないということが分かった。

ぼくはこのことを通して分かったことは、本当の思いやりは助け合うことだ。いくら自分がやさしくても人を助けることができないのは思いやりがないということだ。これからの社会は全ての人が思いやりを持ち、全ての人が支え合うことのできる社会にしたい。それにこれからは、いじめの場面は勇気を持って

「やめてあげなよ。」

と声をかけ、助け、本当の思いやりを持てるような人間になりたい。

優良賞

修学旅行でのふれあい

西小学校　六年　髙村理玖

ぼくは、六月に修学旅行に行ってきました。修学旅行では、クラスの友達や先生方、観光地の方々とのふれあいの中で多くのことを学びました。そのことを一つずつしょうかいしていきます。

一つ目は、観光客とのふれあいです。観光客の方々にたくさん親切にして頂きました。観光客の方々のあいさつに感心しました。それは、ぼく以上にあいさつする声が大きいことです。ぼくは、なぜこんなに声が大きいのかそれはただぼくの声が小さすぎるのか？いや、それはその街の情熱がものすごいんだという考えにたどりつきました。それはまちがいないと思います。そこの街はあいさつだけでなく話し上手な人もたくさんいました。例えば、「どこから来たの？」とか「元気だね！」など話を盛り上げてくれてとても話しやすかったことです。観光客の方々との楽しい会話が頭からはなれず、どうしてやさしく接してくれたのかと気になっていました。しばらくして「はっ」とぼくは気がつきました。それは、やさしさと相手に対しての親切心があるからだと思いました。やさしさと相手に対しての親切心があればあの観光客の方々みたいになれるということがわかりました。このことを通して学校では人との関わりが多いので特にあいさつができればいいなと思います。

二つ目は、観光場所とのふれあいです。記念館や公園に行き、現地に行かなければ分からないことがたくさんあることに気付きました。例えば宮沢賢治の生き方やどんな童話を書いたのかは、自分の目で見た方がなっとくすることができるし、資料写真よりも見て回れる良さがあり、実際感動したこともありました。現地へ行くことで見たり、さわったりのふれあいができて、とてもしんせんに感じました。この体験をしたから学んだことを修めることができました。行って調べたことも思い出になりました。観光場所にお土産の店がありました。そこでしか売っていないものがありました。観光場所で実物を見ることで人物の生き方やそこで何があったのかがすごく分かり、ふれあいを感じました。

三つ目は友達とのふれあいです。生活班で行動していたので生活班でのきおくが残っています。いつもの給食の時間は、もくしょくでつまらないし、話が盛り上がらないからあまり楽しくないけれど、ホテルでみんなと食べた時は、おいしそうなごちそうを前にしてテンションが上がりました。だからその日にあった楽しい話ができたり、みんなの笑顔が見れたりしました。やはり食事のときはみんなの笑顔を見ながら食べると楽しいし、すてきな思い出が作れるのだと感じました。

人とふれあうことでたくさん学び、成長することができます。「ふれあい」とは、心が豊かになるコミュニケーションだと思います。

佳作

思いやり

西小学校　五年　市川　菜々子

私は、思いやりが無いのは、とても悲しくさびしい事だと思います。

まず、「思いやり」とは何なのかから考えましょう。思いやりは、人を少しでも楽にさせる魔法なのかもしれません。理由は、ぼ金のようです。ぼ金は、世界のまずしい家にも、自分のたった五十円、百円でも助けられるからです。さらに、次のような事がありました。

私が、交通安全の日で、その時は自転車を持っていて、横には用水路でした。その時の私は、自転車を引っぱるのが難しく、せいいっぱいでした。歩いていると、友達の自転車を見たいあまり不安定ながらも走りました。すると、私とあいさつをいつもかわすおじいさんが前にいました。おじいさんが前にいるので、「おいこしたい」「走って、つきぬけてもいいんじゃないかなぁ」という、不安だらけのまま歩いていました。そんな時に、「つるん」と、足をすべらせてしまいました。自転車が用水路側にあったので、自転車のタイヤだけがぬれていました。前にいたおじいさんが気づき、タイヤをふいてくれました。先ほどまで、「おいこしたい」「じゃまだなぁ」と思っていたあのおじいさんが。私は、こういう時に何を言おうか迷っていました。言う答えは、

「ありがとうございました。」

当たり前です。しかし、私は、たったの十一文字を言えませんでした。そのおじいさんには、その十一文字が、思いやりだったかもしれないのに。思いやりというのは、この十一文字だけでもできます。私は、このきっかけから、

「ありがとう。」

を言えるようになりました。

さあ、本題に入りましょう。思いやりが無いとなぜ、とても悲しくさびしいと考えたのでしょうか。一つ理由を挙げます。

一つ目は、まずみなさんに問います。「思いやり」というのが、この世界から無かったら…。あなただったらどうですか。私が想像するに、ふつうの家庭では無くなるはずです。家での思いやりは、少しのことから考えると、お手伝いなども入るのかなぁと思います。そんなことから考えると、思いやりが無いと考えると、私は、ひどい世の中になっていくと考えるからです。想像してみてください。路上で転んだ人がいるとします。思いやりはこういう時に使います。「大丈夫ですか。」と。しかし、そんな思いやりが無いと、転んだ人が、「だれも自分の事なんか」となってしまいます。最悪な時は、血が出ているかもしれません。骨が折れているかもしれません。そんな事は少ないかもしれませんが、このような最悪の事にならないためにも、どん

なに小さい思いやりでも必ずしましょう。
　このように人に思いやりを持たないのは、とても悲しく、そしてさびしいです。
「ありがとう。」
「大丈夫ですか。」
を忘れずに、思いやりを持って生活してください。さらに自分でも、できることをがんばりましょう。

佳作

たすけあいを大切に

西小学校　六年　野村日真

　ぼくは、三年生からバスケ部に入っています。ぼくは、バスケ部に入ってたすけあいを体験したことがあります。
　一つ目は、練習や試合のときに、プレーが成功した時や失敗した時に「ナイス」や「ドンマイ」と、言っていたことです。「ナイス」や「ドンマイ」と言われると次もがんばろうという気持ちになれるので、ぼくもしっかり言うようにしたいです。そして、みんなで協力していいプレーやチームプレーを増やしていきたいです。
　二つ目は、試合に出ないときや出ていない人がおうえんしていることです。前までは、大きな声でおうえんしていました。だけど、今はコロナでおうえんが禁止になりました。だからといって、何もしないんじゃなくてはく手をしたり、タイムアウトのときにうちわであおいだりしてあげたいです。そして、みんなをサポートしたいです。ぼくはちがう学校のバスケ部に入っています。だけど、ちがう学校の人にもやさしく教えたり、いっしょに遊んだりしてあげたいです。そして、チームワークを良くしてどんどん強くなりたいです。地区大会を優勝して、県大会にみんなでいきたいです。どこのチームにも負けないようにたくさん練習してうまくなりたいです。下学年にもやさしくドリブルを教えたり、遊んであげたりして仲良くしていきたいです。もっと強くなるために、まじめに練習したりコーチの話をしっかり聞いたりしたいです。そして、ふだんからみんなのことを思いやって行動したいです。
　次に学校では、修学旅行がありました。そのときにたすけあいを体験しました。それは、チャグチャグ馬コを作るときにどうすればいいか分からなくなったときに同じグループの友だちが教えてくれたことです。やさしく教えてくれたので、上手に作ることができました。だから、ぼくもこまっている人がいたらやさしくせっしてあげたいです。ほかにも、迷ったときにグループの人と話し合ってその場所にやっとたどりつきました。だから、協力して話し合ったりすることは大切だと思いました。
　二つ目は、授業の問題が難しくて分からなかったときに、友達がヒントをくれたことです。ヒントをくれて、その意味が分かったのでその問題はできました。なのでうれしかったです。ほかにも、算数の授業でグループを作って話し合うときにみんながいろいろな考えを出していておもしろかったです。なので、これからもたくさんの求め方を考えていきたいです。
　これからは、部活や学校でだれかがけがをしたり、具合が悪くなったりしたら「だいじょうぶ」と声をかけてサポートしたいです。学

校では委員会やクラブがあるので六年生どうし協力しあい、うまく進められるようにしたいです。そして、どこでも元気のあるあいさつをしたり、みんなで協力したりして過ごしていきたいです。

佳作

ぼくの考え

西小学校　六年　山下冬弥

ぼくの思う思いやりとは、相手の立場に立って考え、相手の気持ちを大事にして行動することだと思います。思いやりのある人は、人の話に耳を傾け、感謝の気持ちを大切にしている人。逆に、自分の事しか考えていない、親切をされることをあたりまえと考える人は思いやりの欠ける人ではないかとぼくは考えます。

前に病院の玄関付近で名前を呼ばれるのを待っている時に、外から車いすに乗ったおじいさんが入ってきました。そのまま、中に入ってくるために、スロープを通ろうとしていたが、くつが並んでいて車いすが通れるスペースがありませんでした。すると、近くにいた男性がさっと近寄り並んであったくつをよけて、車いすが通れるようにしていました。ぼくも動こうとしたけれど少し考えている間にその男性が、考えるよりも先に行動したことがすごいと思いました。だからぼくも、この男性のようにすぐに行動に移せる人になりたいです。また、家族旅行に行った時の朝食バイキングの時に、パンをおかわりしようと取りに行ったがなかったので、席にもどってきました。すると数分後、男性スタッフの方が、

「パンを補充したのでどうぞ。」

と、席にすわっていたぼくに声をかけに来てくれました。ぼくはおどろきました。その人にパンがないことを聞いたわけでも聞かれたわけでもないのに、ぼくの行動を見て気にかけていてくれたことに感心しました。お母さんもレストランスタッフやサービス業では、あたりまえの事かもしれないけれどできる人とできない人がいると言っていました。ぼくもそう思いました。常に周りを見て行動できる人になりたいです。ニュースではときどき、つかまりたかったから他人に危害を加えたり、お金がないからと万引きしたりする人は自分の事しか考えていない自己中心的な人で思いやりの欠ける人だと思います。

ぼくが見た男性やレストランスタッフのように相手の事を考え行動できる人たちが増えると、思いやりの心を持つ人が増えて悲しいニュースや世界で起きている戦争もなくなるのではないでしょうか。大人だけではなく、ぼくたち子供も、友達や先生、周りの人の話に耳を傾け、感謝して思いやりのある行動をできると思います。

中学校の部

最優秀賞

日々の優しさ

第一中学校　三年　中村未空

「ただいま。」

家の中がいつもと違い騒然としていた。母が慌てて電話をかけている。祖父が倒れたのだ。間もなく救急車が到着し、救急隊員の方々が祖父を病院に搬送してくださった。重いスクールザックを下ろしたが、私の心と体は重いままだった。家族みんなも重い空気になり、現実を受けとめようとしていた。その日も、勉強や部活に疲れ、ご飯を食べて、早く寝たいなと考えながら家に帰っていた。いつもの一日が今日も終わると思っていた。しかし、いつもの一日は毎日続かなく、いつものなにげない一日を送ることが、いかに幸せであるかと気づかされる日になった。

祖父が倒れた日、何も手につかず、色々なことを考え思い出していた。祖父は無口であるが兄と私を大切にしてくれる優しい人。私は祖父が大好きだ。小さい頃は、夜勤で家にいない母に代わり、オムツ交換をし、一緒に寝てくれた。病気になれば私をおんぶし、田んぼのまわりをずっと歩いてくれた。泣いている私を、いつも「大丈夫、大丈夫。」と優しく励ましてくれた。たくさん大事にしてもらったことが、頭の中をグルグルとかけめぐっていった。ふと、祖父の部屋に入ってみると、数年前からのカレンダーが捨てずにたまっていた。私が小学生の時の下校時間が書きこまれていた。必要な時、迎えに行けるように考えてくれていたんだ。その字は、かすかにふるえているようにみえ、頑張って書いてくれていたのだと思う。また、自転車のついたチラシも何枚も保管されていた。私に自転車を買ってあげたいと言っていたのを思い出す。祖父は遊びに行くこともなく、服を買うこともほとんどしなかった。穴が空いたら自分で縫ったであろう服もあった。祖父の生活を感じると、なぜか淋しさがこみあがってきた。

中学生になり、忙しくなったことで、祖父との会話が減り、たのみごとをする日も少なくなっていった。小学校から今まで、朝刊についてくる子供新聞をテーブルに置くことは、祖父の日課だった。今思うと大人になるにつれて離れていく私との心をつないでいたいとの気持ちだったと感じる。

お盆が過ぎた今、日が暮れるのが早くなり、涼しい風が吹いている。そんな日の夜に、母に呼ばれて外に出た。外には弱っている小さなクワガタがいた。弱々しく在りながらも、一生懸命生きようと羽を広げて飛ぼうとしていた。しかし、ひっくりがえってしまった。その姿を見て、小さな虫達も一生懸命生きようとしているんだ…。みんな必死であると感じた。生き方は違うけれど、命の尊さは変わらない。祖父も普通の毎日を送りたいのであろう。

私の兄は高校三年生で進学か就職か進路に迷っていた。でも、祖父のことをきっかけに介護をする家族の大変さを知り、介護福祉士になろうと決めた。兄は祖父の優しさを受けていたため、お年寄りと接するのが好きだ。兄は不器用だが、笑顔と明るさがある。家族と離れて暮らすお年寄りの方も沢山いるのだと思う。その中で、自然に笑顔にできる介護福祉士になってほしいと思う。みんなの笑顔を少しでもつくっていってくれたらなと思う。

祖父はまだリハビリの為入院している。コロナウイルスの影響で面会も出来ていない。どうしているのだろう。どんな気持ちで毎日過ごしているのだろう。祖父から小さな小さな優しさを日々もらっていたのだと感じる今、私には何ができるのだろうか。今も頑張って生活しているんだろうな。ただ今は、小さい時によく言われた言葉。何かあったら「大丈夫。大丈夫。」と笑顔で伝えたい。

講評

何気ない一日の繰り返しの中で、小さな優しさや思いやりをたくさん受け取っていたことに気付き、そこから自分はこれから何をすべきかについて深く考えていることが分かります。

祖父や兄の生き方を通して、自分のこれからを考え始めているところに大きな成長を感じます。

優秀賞

思いやりの形

切田中学校　三年　東（ひがし）　航正（こうせい）

僕は、母からの思いやりを感じることがあります。例えば、僕がテスト期間のときに、「お手伝いしてくれなくても、大丈夫だよ。」と声をかけてくれたり、運動の後に冷たいお茶を用意してくれていたりします。僕はこれに、すごく感謝していますが、同時に気づくこともあります。それは、母の思いやりは、僕が置かれている状況をよく知ったうえでの思いやりだということです。

思いやりは、単純にその人がこまっていることを解決するだけではなく、その人は次、どんな困難にぶつかるかを考えることだと思います。「母は、テスト勉強で時間がない僕を思いやって、声をかけてくれたんだ。運動後でのどがかわいている僕を思いやって、お茶をくれたんだ」と考えると、僕には少しレベルが高いような気がします。でも、そんな思いやりの行動をできるようにがんばりたいです。

母は、ものすごく周囲に気配りしています。自分も室長です。なので周りをよく見ているつもりです。でも母はいろんな角度から見ています。

部屋が暑かったので、エアコンをつけたとします。すると母は、寝ている人がかぜをひかないよう、タオルをかけます。次に、みんなに寒すぎたりしないか、聞きます。また、冷気がもれないように、窓を閉めています。母はこれを、仕事に出ているときも、家にいる僕に電話で確認します。常に、僕らが快適な状態でいられているか、心配し思いやってくれています。自分が、かぜもひかずに健康でいられること全てが、母の思いやりのおかげだと思います。

でも、僕は母が気にかけてくれていることを、面倒くさく感じてしまうことがあります。僕の身近なこと、将来のことを全力で見て、考えてくれる母の労力は、僕が想像している以上だと思います。母との会話や関わり一つ一つを見直し、ぶっきらぼうにふるまわないようにしたいです。そうすることで僕もちょっとでも、母に近づけるかもしれません。

家族やクラスメートなど、母以外の人への思いやりも忘れないように、人の立場に立って、いろんな角度から考えてみたいです。

自分は、まだ子供だということを、言いわけにして、周りへの配慮をおこたっていると思います。感謝の気持ちや、人を心配する心も思いやりだと思います。何かしてもらったら「ありがとう」、体調が悪そうな人には「大丈夫？」と声をかけるということも、僕は恥ずかしがり、周囲の人にまかせてしまいます。それをなおすことは、難しいです。だから、初歩的な一歩として、最初に家族に声をかけられるようにしたいです。母は、普通に思いやりを発揮できる段階だと思います。僕も周りの人に、思いやりの行動ができるようになって、思いやりを広めたいです。

思いやりには、いろんな形があると思います。日本や世界という単位で考えてみると、災害があった地域へのボランティア活動や、募金です。最近では、ウクライナ難民への支援やコロナウイルス患者とたたかう医療機関への支援もあります。募金などは、コンビニエンスストアやスーパーなどで行われていて、簡単に行うことができます。毎日テレビで、流れている世界のいろいろな問題も、そういう形で解消され、いずれかは解決へ向かうかもしれません。みんなでエールを送って、世界のみんなでたたかっている問題に一つずつ勝っていきたいです。このような思いやりが広がっていき、僕より幼いのに、僕の知らないような苦しみを受けている子どもや、僕の思っている普通の生活が、送れない人々が一人でも減ってほしいです。

思いやりには、たくさんの形と種類があり、僕らが共存していく以上、絶対に必要だと思います。身近で様々な問題と、たたかっている人は、たくさんいて、あなたもそうかもしれません。そんな全ての問題は誰かの行動から変わっていきます。身の周りの人や地域の人、世界の人の一人一人に思いやりが満ちて行動してほしいです。それが、みんなの生活をよりよくする、大きな一歩だと思います。

講評

思いやりについて、母親から感じたこと、自身が学校で意識していること、そして、そこから世の中や世界にまで視野を広げているところが大変素晴らしいと思います。

そして、様々な課題を乗り越えていくためには、一人一人の思いやりが大切であることを強く思っていることがとてもよく伝わってきました。

優秀賞

二つの後悔とあの学習

第一中学校　二年　瀧内（たきうち）　真依（まい）

「障害者」。この言葉を聞いて、みんなは何を思い浮かべるだろうか。小学生だった私は、

「健常者と違って大変そう。」

客観的な意見を述べていた。何度道徳でその題材について勉強しても、客観的な意見しか出てこなかった。自分の身近にも障害者がいるのに。しかしなぜあまり深く考えなかったのか。それは、あることから目を背けたかったからだ。

障害をもっている親戚のおばさんを車イスで押している姉兄や両

親。私はその姿をいつも遠くから見ていた。（一緒にいると注目されそう。）（もし友達と会ったら陰でなにか言われるかもしれない。）そう、根も葉もない事を勝手に思い込み、外出先では私から近づいたり話しかけたりすることはあまりなかった。

そんなことをずっと思っていた小学六年生の私を変えてくれた、ある総合の学習があった。それは、「福祉」に関連しているものについてまとめる学習だった。

「小学六年生にもなったし、現実から目を背けず、一度本気で『障害』について考えてみよう。」

そう思い、障害の種類や障害者やそのご家族の様々な考えなどについて調べた。また、母に親戚のおばさんの詳しいことについても聞いた。障害の種類やレベルによって、本人やご家族の考えが異なっており、様々な視点から考えることができた。その中で私が一番感じたのは、身近に障害者がいない方と障害者やそのご家族との考え方の違いについてだ。身近に障害者がいない方だと、私のようにどこか客観的な考え方をする意見がみられるが、障害者やそのご家族は、やはり一緒に生活してお互いに苦労を知っているからか、はっとなる内容がたくさん書いてあり、胸が熱くなった。その時私はやっと、それぞれの立場になって考えることができた。それと同時に、後悔もあった。私の行動や考えがどんなにおばさんを傷つけたか、私が思う嫌なことよりも、障害者やそのご家族の方がもっともっと嫌でつらいことが山ほどあるのに。なんてことをしてしまったんだ。そう、強い思いがあった。

これらの考えや思いを私は模造紙にまとめあげた。みんなにももっと知って身近に感じてもらいたい、その思いを込めて。

完成した模造紙を見て私は、（この学習をして本当によかったな）と心からそう思えた。

それから数週間後。おばさんが我が家へ泊まりに来た。そして、今まで以上に歩くときのお手伝いや会話などを積極的にした。あの学習をしたおかげか、気持ちも少しずつ理解できるようになってきた。また、数ヶ月経ってから来たときには、みんなで外出し、車イスを押してあげたり、物を見ながら会話をかわしたりした。

このように、直接関わってから気づいたことがあった。それは、どんな時でも笑顔で明るくて優しいおばさんと会うことでの幸せだ。「あっはっはっ！」と明るい笑い声や笑顔で私の話を聞いてくれたりする優しいおばさんを見ていると、私まで元気をもらえる。この気持ちをずっと前から知っていた私の家族がとても羨ましく思えた。もっと前から気づけばよかった。周りなんか気にしなきゃよかった。また、後悔した。しかし、ずっと引きずってはいけない。それを考えているよりも、おばさんと一緒にいる方が絶対にいいから。生きられる年数も私より長くはない。二つの後悔とあの学習を胸に刻み、また次会うときも同じ楽しい時を過ごす。

講評

各学校で様々な体験活動が行われていますが、その中で学んだことと、自らの生活の中での出来事を上手く結び付けて考えられていると思います。

さらに、そこから新たな発見をし、これからの生活をどうすべきかをしっかりと考え、実践しようとしているところがとてもよいと思います。

優秀賞

人と関わる大切さ

第一中学校　三年　村中香音

私の母の仕事は保育士です。私は約三年前、夏休みにボランティアとして保育園の手伝いをしていました。普段は小さな子どもとはふれあうことがなかったのでよく接し方がわからなかったです。しかし、少しずつふれあっているうちに慣れていきました。一緒にお散歩をしたり、手遊びしたり、ご飯を食べたりとさまざまなことを通して小さな子どもたちと仲良くなり楽しく過ごしました。ボランティアを通して小さな子どもたちだけでなく、たくさんの保育士さんともたくさんお話をしてふれあうことができました。また、小さな子どもとの接し方や保育士さんの仕事も少しですが、学ぶことができました。

私はおばと一緒に住んでいます。おばは地域の方ととても仲が良いです。なので私も小さい頃から地域の方々に助けられてきました。時には、バスに乗り遅れた時には学校に送ってもらうこともありました。また、畑仕事をしている方が多いので手伝いをしに行ったときは優しく教えてくれたり、お菓子をくれたりしました。最近はあいさつをすると「最近どう」とかなにか必ず声をかけてくれます。手伝いに行けなくなった今でも畑でとれた野菜や果物をくれます。地域の方はいつでも優しくて親切です。

私の地域には、「ろまんパーク」という道の駅があります。地域の子どもから大人や高齢者の方までみんなから愛され利用されている道の駅です。私たちの学校ではいつもお世話になっているろまんパークさんにお礼という形で花を植えたり、そうじをしてきれいにしたりしています。その時にも私たちだけでなく組合の方々に協力してもらい一緒に活動しています。普段は関わることのない組合の方々とこういった学校の学習時間を通してふれあうことができています。私たちの学校は校外学習が多いです。そのため、地域のさまざまな方々と学習を通してふれあい、助け合っています。

今まで三つの「ふれあい」について書きましたが、私は普段の生活の中でたくさんの人とふれ合っています。今、思えば私は高齢者の方とよくふれ合っています。高齢化社会だからでしょう。今は若者が少なくなっていて少子化が進んでいます。高齢者なのでいつなにが起きるかわからないし、いざという時に助けてくれる人がいないかもしれません。しかし、私は普段からふれあっているからこそ、助け合うことができると思っています。

今までたくさんの人と関わってきて「ふれあう」ということはとても大切だと思います。そもそもふれあわなければ何もはじまらない。何も変わらない。私は、ふれあうことでその人のことを知り、仲良くなり、共に助け合いができる関係をきずけると考えています。

また、私は小さい子どもから高齢者まで関わるきっかけがありました。そこから私が学んだことは、対する人の年齢や立場によって接し方が異なるということです。簡単に言うと小さい子どもと話すときはゆっくり優しく難しい言葉は使わずに話す。高齢者と話すときは方言を使ったり、大きな声で話すということです。年齢、立場、状況によって話し方などは異なってきます。ふれあい、少しずつ慣

れていき、仲良くなり、共に助け合うことができる関係をこれからもきずけるように相手のことを考えて行動し、お互いに良い仲間を増やしていければいいなと思います。

講評

幼児から高齢者まで幅広い年代の人とのふれあいを通して、具体的にどう接していけばよいのかを、実践を通して深く学ぶことができたことが表現されています。

相手のことを考え、思い、行動していくことの大切さを感じ、これからの生活に生かしていこうとするところがとても素晴らしいと思います。

優良賞

もし、障害者に出会ったら…

切田中学校　二年　畠山紗季（はたけやまさき）

私は、もし、障害者に出会ったら、どのように接すればいいのかと考えました。そこで、自分の経験と一冊の本を元に自分の将来を考えてみました。

みなさんは、「障害者」という言葉を聞いて、どのようなことを思いましたか。私は、普通の人よりも頑張らなきゃいけない、かわいそうな人だと思いました。

私の祖父は、病気で今年の六月初めに亡くなりました。祖父は、脚の病気のせいで、毎日車椅子を使っていました。でも、車椅子を使う前は、杖を使っていました。杖を使っていた時は、ご飯になったとき、私達兄弟に

「キッチンまで手伝って。」

と言いました。私は面倒臭くて、いつも兄か弟に行かせていました。私は、そのことを思い出すと、自分は情けなかったなと思いました。私は、いつも祖父が感じている痛さを今知りました。あの時、私がすぐに手伝いに行っていれば、祖父はもっと生きていたのかもしれない、そう思うと自分は本当に思いやりがない、自由人だと思いました。祖父はとても優しい人でした。私達を常に気づかってくれたとてもとても優しい人でした。今になって、死なせたくなかったなと思いました。だから、これから祖母の手伝いをたくさんして、迷惑をかけずに、守って、安心させて、祖母を祖父に会わせたいなと思いました。

私は、「ごめんね　ありがとう」という本を読みました。その本は、死んでしまった娘の一生を母親が、書き示したものです。この本には、視覚障害を受けてしまった娘が生まれたときから、死んでしまった後までの母親の気持ちが示されています。最初のページに「小さい時からのことを書きつづってみることにしました」という言葉があります。まずそこで、母親は娘のことをとても愛していたんだなと思いました。また、生まれてきた娘の状態を知ると、母親はショックを受けていましたが、すぐに受け入れたそうです。そして、小学校に入り、参観日の日、母親がある子どもに、こう言われたそうです。

「〇〇ちゃんと同じ組にならなくてよかった。だって、〇〇ちゃんと一緒になったら、病気がうつっちゃうからってママが言って

た。」

母親は、ショックを受けていたそうです。私だったら、その子の家族を許さなかったと思います。私は、障害者の母親はすごいなと思いました。なぜなら、自分の子どもがどんなに批判されても、自分の子どもである限り、愛して大事にしていたからです。私は、そんなことができるか不安になりました。そして、最後のページに実際に母親が天国の娘にあてた点字の手紙がありました。私は、それを読んでみました。題名には「ごめんね　そして　ありがとう」とありました。私は、その題に涙を流してしまいました。私が娘だったら、障害を持っている私にもこんなに愛してくれる人がいるんだなと思ったと思います。それに、娘にとっては、とてもうれしい言葉だと思います。私はこの手紙を読んでいて、自然と点字を覚えていました。表紙の裏に、「ノンフィクションを読み終えたころには、点字を真剣に学びたくなることでしょう。そして、あなたの心に生きる勇気がましています」と書いてあって、まさにその通りだと思いました。

私は、七月中旬に福祉体験をしました。二日に分かれて行われ、一日目は点字の読み書きを学びました。また、目を隠して歩いてみたり、卓球をしたりしました。点字の読み書きは、ベースとなる「あいうえお」を覚えれば大体がわかり、すぐに上手くできました。目を隠して歩くことと卓球は、そう簡単にはいかず、パートナーの腕をつかんでいないとどこかに落ちそうになったり、ずっと目を隠しているので気持ちが悪くなったりと、慣れるのに時間がかかりました。

私は、この本と福祉体験で点字に親しむことができました。福祉体験では、視覚障害者の身になって、視覚障害者の気持ちを理解しました。本では、視覚障害者の気持ちを理解し、どのように視覚障害者に接すればいいかを考えることができました。そして、視覚障害者に必要なことは、自分の状態を受け入れ、物事に積極的に取り組む勇気なのだと考えました。また、障害者の両親に必要なことは自分の子どもの状況を受け入れること、子どもの将来を考えること、そして、導く力と愛する力だと思います。障害者の気持ちと接し方を理解することで、将来自分の身に何かあったとしても、少しは役に立つと思いました。これから、もし、障害者に出会ったら、自分が考えたことを思い出し、思いやりをもって、積極的に行動したいと思いました。

佳作

一人一人を大切に

第一中学校　三年　西（にし）野（の）　みいな

私は、生きていく中で「思いやり」はとても大切だと思います。私は思いやりを持つことで、いじめが減ったり、よい信頼関係を築くことができたり、さらに社会に出てからも役立つと思います。私は思いやりとは、相手の気持ちを考えたり、大切にすることだと思います。私は、相手の気持ちを考えたり、その人のことを大切にするなど、相手の立場に立って言動をすることでいじめが減ると思います。また、いじめが起こる前から、友達と仲良くしたり、助け合ったり、誰にでも気遣いをしたりすることで信頼関係を築くことができると思います。このようなことを普段から心がけて身に付けるこ

とで、自分が社会に出たときに、トラブルが起こりにくくなったり、職場の人達とのよい信頼関係を築くことができると思います。

私は、思いやりを持つために心がけていることがあります。まず私は、周りを見て行動をするようにしています。私は、困っている人や辛い思いをしている人がいたら、声をかけるようにしています。私は中学校に入ってから音楽のことが何も分からないまま吹奏楽部に入りました。私が担当している楽器の先輩がいませんでした。最初は、先生や楽器の吹き方が似ている違う楽器の先輩に教えてもらいました。ある程度一人で吹けるようになりましたが、楽譜を読むことが苦手でした。分からないことが多く、周りの友達よりできるようになるまで時間がかかり辛い思いをしました。その時に、先生や友達が声をかけてくれたり、分からないところを教えてくれたりして、がんばろうと思えるようになりました。このようなことがあってから私は、周りを見て行動し、困っている人や辛い思いをしている人がいたら、自分から声をかけようと決めました。辛い思いをしている人達の助けになれるようにこれからもがんばります。

次に、誰にでも気遣いを忘れないことを心がけています。先生や友達にも言葉遣いやよい態度を意識しています。私は、先生や友達に失礼にならないようにしたり、雰囲気が悪くならないようにするために、言葉遣いに気をつけています。また、嫌なことがあったとき顔に出てしまうと雰囲気が悪くなってしまうので、よい態度を意識することは大切なことだと思います。私は、口調が強くなってしまったり、嫌なことがあると態度に出てしまったりすることがあります。このようなことが重なって、友達に嫌な思いをさせてしまったことがありました。このことから、嫌なことを顔や態度に出すことが相手を傷つけてしまうということに気づき、直すようにしました。それからは、友達を気遣い、相手の気持ちを考えられるようになりました。友達ともめることも減りました。私は、相手を気遣い、言葉遣いや、よい態度を意識してこれからもがんばります。

このようなことから、生きていく中で思いやりを持つためには、周りを見て行動したり、誰にでも気遣いを忘れないことが大切だと思いました。私は、色々な体験をしましたが、これからも大変なことがたくさんあると思うので、誰にでも思いやりを持って、行動していきたいと思います。そして、自分だけでなく、みんなにも思いやりを持ってもらい、いじめのないよりよい学校にしていきたいです。また、来年は高校に入るので、新しい友達ともよい信頼関係を築けるようにがんばります。

佳作

たすけあい

十和田中学校　三年　久保悠也

僕がたすけあいを選んだ理由は、昔のテレビを見ていたら、武田鉄矢さんが「人という字は、人と人とが互いに支え合って生きている」といっていて、人間には一人で生活するのは難しいと思いました。

僕の母親は、介護福祉士です。この仕事もたすけあいだと思いました。僕は何回か母親の仕事場に行ったことがあります。働く人みんな、おじいちゃん、おばあちゃんと笑顔ではなしていました。

一人ではできなくなったかもしれないけど、誰かの手助けがあることによって行動範囲が増えます。おじいちゃん、おばあちゃんが元気に過ごすためには、大切な仕事です。人と人とがたすけあわないと、このようにおじいちゃん、おばあちゃんは、元気に楽しく過ごすことはできなくなると思います。僕の姉も看護師になろうとしています。これもまた、たすけあいだと思います。患者さんがいないと、病院もまわらなくなります。お医者さんが診察して、病気じゃないかたしかめたり、手術するなど、命をたすけているため、たすけあいだと思いました。そのほかにも、僕は地区でおこなっている、草とりの活動や祭りなどに参加しています。

草とりは、若い人が少なく、ご老人が多く参加していました。地域の草をとるだけできれいにみえます。そのあとに花などを植えます。地域が色とりどりになって明るくなったように思います。ほかにも祭りにも参加しました。小学生や中学生などいろいろな学年がいました。みんな練習はきつそうにやっていましたが、本番は楽しそうにやっていました。地域の人とたすけあって生活しているのだと思いました。

僕はこのほんわかハート展のたすけあいで地域の人や家族などみんなでたすけあいながら生活しているとあらためて思いました。今は少子高齢化がすすんでおり、今までの伝統が、引き継がれなくなったりコロナで、いろいろなものがなくなったり、規模を小さくしおこなったり、みんなのたすけあいがあってこそできるようになっていると思います。ＳＤＧｓでもあるように、食べることができない人や勉強ができない人がいるため、募金などをして世界から食べられない、勉強できない人を少しでもへらしていきたいです。大人になった時は、みんなでたすけあって生きていきたいです。

高等学校の部

最優秀賞

たった一つの地球

十和田工業高等学校　二年　木村妃実花

今、この瞬間突然戦争が始まったら、あなたならどうする？

私は、どうして戦争が起こってしまうのか不思議で仕方がない。何げない人々の日常生活、笑顔、未来までがほんの一瞬で奪い去られてしまうのだ。衣服は汚れて、食料も無くなり住む所までもなくなってしまう。やがて子供達は学び舎に通えなくなってしまう。

「僻み合っても、笑顔はうまれないのに。」

「妬み合っても、良き物はうまれないのに。」

「嫉み合っても、何も解決しないのに。」

考えただけで私は悲しい気持ちになる。

「青い空を墨のように黒く塗り潰さないで！」

「緑の山々を灰色に焼き尽くさないで！」

心の中で私は強く叫び、そう思っている。

人と人とが手を取り支え合い、助け合う気持ちを持つ事で戦争は起こらないのではないだろうか。世界の人々に、もっと知ってほしい。この気持ちが届いてほしい。

此の中、この地球の何処かで銃弾が飛び交っているのが現実だ。罪のない人々が、犠牲になっている国もある。

私達は戦争のない国、日本で暮らしている。着る物、食べる物、住む所、何不自由のない生活を送り日々過ごしている。それだけでもありがたいことだと私は感謝している。

皆さんは、どう思うのだろうか？

「今の生活が、当たり前だ！」と思う人も少なからずいるのではないだろうか。その当たり前の生活を維持していく上で、人への優しさ、思いやり、助け合いは欠かせない事だと思う。日常生活において、思いやり、助け合いは現実に遭遇すると思う。ほんの些細な事でいいから、少しの思いでいいから耳を傾け、目をそらさず実行していけるなら、今よりももっと素晴らしき世界になると思う。

私は何度でも言う。

「銃を持つ代わりに、手を取り助け合い、思い合おう。」

「核兵器のボタンに触れるのではなく、心のボタンに触れ合おう。」

武器を造るより楽器を造ろう。今よりきっと素晴らしき世界を創る事が、私達には出来ると思うから。

空青く、緑豊かな国で過ごしていきたい。

今もまた、これからもずっと。

彩度の高い色で、私達の色相環を造っていこう。

たった一つの地球なのだから。

講評

世の中の出来事から、自らが感じたことをはっきりと、そして、自分なりの言葉で表現することができている点が素晴らしいと思います。

このように思いを言葉に表し、作文を通して思いを多くの人に伝えられることができれば…作者が望む世界に近づいていくと思います。

優秀賞

一輪の花に愛情を

三本木高等学校　一年　鶴ケ谷（つるがや）　心（みは）陽（る）

「何を楽しみに頑張ればいいのか」という疑問をもつ人がいる。コロナにより大会、行事がなくなり始めて三年目。コロナ感染拡大防止対策をしていても毎日全国で二十万人ほど感染している。私はコロナを遠い存在に感じていたが、それは間違っていた。

私の身近な人がコロナに感染した。初めてコロナを近い存在に感じた。その時、「コロナに対する考えがあまかった」と後悔した。感染した子は常にマスクをし、不要な外出を控えていた。感染しないように努力していたのに感染してしまったら全ての責任を感じてしまう。体調だけでなく、精神状態も悪くなる。ネット社会を生きる

今、コロナに感染したことを他人に知られれば簡単に誹謗中傷をあびるかもしれない。そんな不安を抱えながらも十日間ほど隔離され、一人での戦いが始まる。発熱や倦怠感といった辛い症状があっても人の温かさを感じることができない。ただの熱なら家族の優しさを感じながら治すことができる。一方でコロナは孤独との戦いでもある。家庭内隔離だと家族の声は聞こえるのに自分はその会話にまざることができないのだ。自分がいないのに笑い声や楽しそうな会話が聞こえると寂しくなる人もいるだろう。ごはんも一人で食べなくてはいけない。家族とごはんを食べる「共食」では、楽しくごはんを食べられることや家族とのコミュニケーションをとることができることなどのメリットがある。部屋にこもっている人もごはんの時は家族と会話ができる。しかし、コロナに感染してしまうと家族と会話ができない。コロナになってしまった私の身近な存在の人も一人の部屋で孤独を感じながらも耐えていた。会話をしたい、学校に行きたい、遊びたいなどの感情を抑えることができず泣いてしまったこともあった。その時、その子の母が部屋に一輪のアサガオを届けていた。子どもならお菓子やゲームを届けてあげた方が喜ぶと思うだろう。しかし私は母が子にアサガオを届けたことに納得した。なぜならアサガオの花言葉は「愛情」だったから。言葉を交わせない親子だけど、母は一輪の花に言葉を委ねたのだ。私は母の言葉のない行動に感動した。言葉がない時にこそ、最大の愛がこめられていると思った。コロナに感染してしまった子も、その花の意味を知り、元気をもらったそうだ。部屋の中は一人でも心の中にはみんながいると思うと心強い。

私はこの知り合いの親子の経験から家族について考えることができた。家族ではない人との助け合いも大事だが、家族にしかできない助け合いも大事だと思う。人生の中で一番近い存在なのは家族だと私は思う。その家族を大切にできなければ友達や恋人、仲間などの周りの人を大切にできないと思う。知り合い全員を大切にするのは難しいだろう。だから、自分が一番お世話になった人、助けてあげたいと思った人を大切にすればいいと思う。私は辛い時、家族の温かさに助けられている。どんな時もどんなことがあっても家族の近くにいたい。そう思わせてくれる家族を私は大切にする。言葉がなくても想いは届く。だけど、「ありがとう」や「ごめんなさい」は言葉で届けたい。言葉は大きな力をもっているから、悪口をなくしたいし、感謝や反省の気持ちはしっかり言った方がいいと思う。

私はこれから大きな力をもつ言葉を使ってたくさんの人を笑顔にしていきたい。私は助けてもらわないと生きていけない。みんな同じだと思う。今までもこれからも助けてもらった分、他の人を助けて笑顔にする。最初から知らない人に声をかけて助けてあげるのは難しい人もいるだろう。その時は小さな一歩からでいいと思う。誰かが転ばないように落ちているゴミを拾ったり、常に点字ブロックの上に何も載っていないか気にかけたりすれば人として内面から変われると思う。私は特にあいさつを頑張っている。落ちこんでいる人でも元気よくあいさつされたら少しは気分が良くなると思うから。人の役に立っているか分からないことも少しずつ続けていけば力になると信じている。助けてあげることはみんなが喜ぶプレゼント。私は人の役に立つような人生を歩みたい。たった一輪の花に「愛情」を込めて子どもに届けた母のように。

講評

コロナ禍においては、実に様々なことが起きており、また様々な思いが交錯していることに気付き、そこから自身の考えをしっかりと述べている点がよいと思います。

大きな力をもつ言葉を生かし、多くの人を笑顔にしていきたいとの想いが強く伝わってきました。

優良賞

助け合いで大切なこと

十和田工業高等学校　一年　金崎（かねざき）　凌（りょう）

皆さんは「助け合い」とはどういうものか考えたことがありますか？「助け合い」とは簡単にいうと力を貸し合うという意味があります。例えば、災害など何か大変なことが起こったときにみんなで力をあわせて復興へと近づいていくようなことも「助け合い」となります。

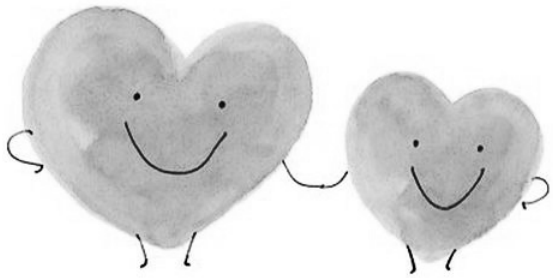
実際にあった事例を二つ紹介します。

一つ目は、二〇一一年三月に発生した東日本大震災です。大地震、大津波が発生し避難生活が始まった後、避難所生活の課題が浮かび、津波で家などを失い生きる気力を失い落ち込んでいる方々も多くいました。そのような中、落ち込んでいる方々を励ましながら、元の生活に戻れるよう食料を分けあったり断水しているトイレの処理方法など被災地のみんなで協力して生活をするための工夫を凝らしながらこれまで様々な課題を乗り越えてきました。そして、被災していない地域からも多額の募金や応援メッセージなどが届いたりと世界中に支援の輪が広がっていることによって今も復興に近づき続けています。

二つ目は、二〇二二年二月から始まっているロシアによるウクライナへの軍事侵攻です。こちらも様々な国から多額の募金や応援メッセージが届いたりと世界中から支援を受けていますが、今他の国から助けられているのは、これまで多くの国とつながりがあり様々な国の方々がウクライナを助けたいという思いがあるから支援を続けていると思います。このように何か災害などがあったとき被災地だけではなく被災していない地域も協力することによって全世界へと助け合いの輪が広がっていきます。

助け合いで大切なことは、自分から進んで人を助けること、助けてもらった人が困っていたら「今度は自分が助ける番だ」と思いながら助けることが大切だと思います。

私自身も普段の生活の中で、助けられていることが多いので、普段から感謝の気持ちをもって、自分ができることを考えながらこれからも様々な方々と接していきたいです。



優良賞

ふれあいが地球を救う

十和田工業高等学校　三年　鳥谷部（とりやべ）　凜（りん）

ふれあいとは、「（縁があって）人と知り合い、交わること」を意味する。ふれあいと聞いて一番馴染みがあるのは、ふれあい体験だと思う。誰もが人生で一度は経験したことがあるだろう。ふれあい体験はよく、幼稚園や保育園、小学校や中学校などで経験することが多いと思うが、なんのために行っているのかを考えた。

ふれあい体験では、幼児や高齢者、障害者、外国人等の人間同士のふれあいもあれば、動物や自然といった、人間以外とのふれあいもある。人間同士のふれあいによって、自分以外の相手について理解を深める力や相手を思いやる力を育むことができる。多くの人が、生活している中で大変なことや不便なことを理解したり、自分より小さい子どもとの接し方を考えることで、普段の生活や今後の生活で人への対応力を高めることができる。そして、少子高齢化社会の中でも、人々が助け合い、多くの人々が生きやすい世界にできるのではないだろうか。では、人間以外の動物や自然はどうだろう。人間であれば同じ人間同士ある程度理解することは可能だが、動物のことは全く分からない。どれだけ考えても、どんなことを考えているのか、どんな生活をしているのかも分からない。では、どうしてふれあうのか。小さな子どもは、かわいいものやかっこいいものに興味を持ち、大切にしたいという気持ちが生まれていると思う。よく、人形やおもちゃを強く抱きしめながら歩いている子どもを見かけるように、動物とふれあうことで、かわいい動物やかっこいい動物を守りたいという感情が生まれる。そして、私たち人間が動物について理解してあげられなくても、動物の周りの環境についてはみんなで考えるきっかけになると思う。今の時代は、地球温暖化の影響で気象が変化し、気温上昇、海水温や海水面の上昇など様々な問題から、地球上に生息する動物が減少している。私たちの生活だけではなく、動植物やその周りの環境を守るためには、全ての人間の知恵や行動、少しの心がけが必要だ。

ふれあいは、自分の周りのものについて知るきっかけとなる。そのきっかけから、日本や世界が救われ、やがて地球を守る力となる。また、その地球に住む人々が助け合い、生きやすい世界になっていく。ふれあいは、この地球をリフォームし、住み心地のよい星にしていくためになくてはならないものなのだ。

優良賞

思いやりのある行動

十和田工業高等学校　一年　兒玉（こだま）　尚大（しょうた）

社会の中で思いやりは数多く存在する。例を挙げると、席を譲る、物を持つ、など数え切れないほど存在する。しかし、それを実践しようと思っていても、行動に移すことはとても難しい。理由は、恥ずかしいと思うからである。

私は、学校に市営バスを利用して登下校をしている。バスの中は、

同じ高校の生徒がほとんどだが、もちろん市営バスなので一般の方も乗ってくる。ある日、私が学校に行くためにバスに乗っていると、年配の女性がバスに乗ってきた。その日はバスの中が混雑しており、とても年配の女性が座れそうではなかった。その時私は、席に座っていたため、譲ろうと思ったが、もしも断られたらと思ってしまい、譲るか譲らないかで迷ってしまっていた。すると、私の前に座っていた同じ学校の人が

「どうぞ。」

と声をかけて席を譲っていた。年配の女性は、

「ありがとう。」

と笑顔で席に座った。私は最初、「他の人が譲ってくれたからいいや」と思っていたが、今になってみると、とても後悔している。その経験から、今では後悔しないように思い立ったらすぐに席を譲ったりなど思いやりのある行動を心がけている。そのおかげで、笑顔が多くなった。

しかし、みんなが思いやりのある行動を取っているかというとそうでもないと感じる。ではなぜ、人は思いやりの行動ができないのか。単なる恥ずかしいだけが理由なのかと疑問に思い、インターネットで調べてみた。やはり、ほとんどの人が恥ずかしいと思っているようだ。中には「自分に何らかの負担がかかってしまうのが嫌だから」や「触れられたくないと思い、あえてそっとしておく」「他人任せにしている」などという理由もあった。この情報を見て、思いやりのある行動は実行することがどれほど難しく、勇気が必要ということを改めて知った。

このように、思いやりのある行動について調べたり、考えたりしてわかったことは、思いやりのある人は、相手がどんな気持ちでいるのかを考え、察することが得意であるということだ。そのため、相手の立場に立った行動が取れ、他人について自分のことのように考え、相手に寄り添った親身な対応をすることができる人ということだ。一見すると、とても難しいことだと思う。たしかに、日常生活において難しい場面もある。しかし、私のようにたった一つのきっかけで変わることができる。そう思うと意外と簡単なことではないだろうか。相手のことを考える余裕や勇気を少し持って行動すること。それが思いやりにつながるのではないかと考える。